2015年
3月号

カトリック笹丘教会
教会ニュース

福岡市中央区笹丘1-16-1
☎761-4504 F761-4524
広報委員会

福岡教区今年度の目標…「信仰の伝達」
小教区今年度のテーマ…「学び、伝えよう、家庭から私たちの信仰を」

倦まず弛まず

主任司祭　遠山満

繰り返し語ることは、根気が要り、忍耐を要します。時には、それが原因で自己嫌悪に陥ることもあります。それにも拘らず、私たちには繰り返し語る必要性のあることが沢山あります。例えば、子供たちに教える必要のあることとして、早起きする事とか、失敗して人に迷惑をかけた時、お詫びする事とか。他の人のお世話になった時、お礼を言う事とか。あまり近しくない人にタメ口を言わないようにとか。私達、大人が子供に教えなければならない事は沢山あるかと思います。時々、私たちは、同じことを繰り返して言っているので、感情的になり、「この間、言ったでしょ」とか、怒って言ってしまうのかもしれません。

イエス様は、この点に関しても、私たちの模範です。イエス様は、物分かりの悪い弟子たちに対して、繰り返し、教え諭されました。特に、御自分の死と復活の予告は、弟子たちに繰り返し語られたことの一つです。共観福音書の中には、イエス様が三度、御自分の死と復活を予告されたことが書かれています。その時の弟子たちの反応は、ある意味滑稽です。一回目の予告の後、ペトロがイエス様を脇へお連れして諌め始めたので、イエス様から、「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間の事を思っている」と叱られます。二回目の予告の後、弟子たちは、自分達の中で誰が一番偉いかを議論していたので、イエス様は彼らに、「一番先に成りたい者は、全ての人の後に成り、全ての人に仕える者になりなさい」と教えられました。三回目の予告の後、ヤコブとヨハネの抜け駆けが原因で、弟子たちが腹を立てた時、イエス様は彼らに、「あなた方の中で偉くなりたい者は、皆に仕える者に成り、一番上に成りたい者は、全ての人の僕なりなさい」と言われました。私は、この時のイエス様のことを思うと、疲れただろうなと同情を禁じ得ません。何故なら、弟子たちの反応が、あまりにも滑稽だからです。しかし、このイエス様は、今の私にも、そして皆さんにも、繰り返し、倦まず弛まず教えて下さっているのだろうと思います。

私たちも、このイエス様の愛に支えられて、次の世代に、大切な教えを伝えて参りましょう。倦まず弛まず、愛を持って教え、私達自ら、模範を示して参りましょう。

拡大信者議事録　　平成27年3月1日

初めの祈り

議題

1.　バザーについて

1）スケジュール

3月1日（日）バザー抽選券・食券作成・ホットドッグ試食

3月15日（日）コーヒーコーナー・バザー参加賞作成

3月29日（日）バザー抽選券販売開始

2）メニューについて

カレー400円150枚　うどん300円100枚　おでん400円90枚

ローストチキン350円150枚　ぜんざい250円80枚　炊き込みご飯300円150枚

ホットドッグ200円90枚　抽選券500円200枚　ゲーム6回250円

3）お手伝い募集について

当日は８時～１１時と１１時～１５時に分けたい。

前日までのお手伝いや、一部分しか入れない場合はその時間帯を書く。

4）テーブル製作について

前回、１脚１０００円４０脚のテーブルをレンタルした。お金がかかるので、

今回、テーブルを作る。まずは、モデルを今野さんに作っていただく。

収納するために倉庫を整理しなければならない。

5）その他

・わた菓子機を購入する。６４０００円ほど。現在寄付を募っている。

信者会で立て替えて、その後も寄付を募る。事あるごとにわた菓子機を運転し、

綿菓子を買ってもらうなどしてお金を集めて、信者会に返済する。

・テントの支柱が１つ壊れていた。菅さんから溶接作業などができると申し出があったので修繕をお願いする。

2．小教区運営組織の可視化について

笹丘教会の組織図をチェックした。今後、補正した上で、総会時に配布し、メンバーが必要なチームについては、メンバーを募集する。

3．今後の予定

3月6日（金）アンナ・ヨアキム会　3月7日（土）ワックス掛け3月8日（日）結婚式

3月１１日（水）東日本大震災４年目　3月１５日（日）コーヒーコーナー

3月１７日（火）日本の信徒発見１５０年周年記念日　3月２９日（日）受難の主日（枝の主日）四旬節黙想会　4月５日（日）復活祭、パーティー山野神父様送別会

4月１０日（金）アンナ・ヨアキム会　4月１９日（日）信者会総会

4月、5月の拡大信者会はありません

終わりの祈り

東日本大震災から四年

キリスト者としてのわたしたちは・・

自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で，私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには，むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。時計の針は十四時四十六分を指したままです。

（気仙沼市立階上中学校の卒業式における卒業生代表の答辞）

東日本大震災から四年、ずっと関心を持ち何か自分にも出来ることは？と行動している川原圭子さんにお話しをお伺いしました。

Q．川原さんは２０１１．３．１１の震災の時はどうされていたのですか。

A．その日は宮崎で友人とファミレスでお茶をしていましたので、地震のことは何も知らずにいました。そこに嫁とひとり息子を嫁の実家の福島に残して海外（メキシコ）に単身赴任していた次男から「すぐテレビを観て！東北が地震、津波で大変なことになっているよ。福島と連絡がとれない」と電話が入り、はじめて地震、津波があったことを知りました。

Q．その後はどうされたのですか。

A．福島の息子の嫁に電話しましたがなかなか連絡がとれず、やっと福島の家族全員が無事だとの確認がとれほっとしたことを覚えています。それから被災地、福島との係りが始まりました。

Q．被災地には行かれたことはありますか、様子はどうでしたか。

A．息子の嫁の実家が福島だということ、そして日カ連の仙台の婦人たちと繋がったこともあり東北、福島には最初の２０１１．８月に福島、それから今年の一

月まで東北（福島県、宮城県、仙台、石巻、南三陸）には全部で４回行っています。行く度に少しずつ変わっていく被災地を見てきました。最初の福島では「ああ～これがニュースで見る仮設住宅か」今思えば失礼なことだが建ち並ぶ仮設住宅は異様な風景と感じたことを思い出します。タクシーの運転手から風評被害に苦しんでいる観光業界、農家の方々の話を聞きました。二回目は２０１２．５月、あの南三陸の防災庁舎などの被災地を地元の青年の案内で廻りました。被災地は建物が無くなったというより、街全体が無くなってしまったという印象。でもまだまだ、瓦礫や、車が山積みになっていました。三度目は２０１３．７月、日カ連の仙台の婦人の案内で南三陸の町で地震、津波で被災した外国人の方々から「姉」と慕われている方に直接お会いして外国人ならではの悲しみ、苦しみの話しを聞くことができ、支援している仙塩地区（仙台、塩釜）婦人たちに今後とも協力を継続していく決意を新たにしました。四回目は今年の一月。仙台で自らも被災し、家を、奥様（まだ行方不明）を津波で亡くされた語り部のおじいさんの話しを聞きました。「津波で家を流され、妻も持って行かれ、近くの集会所に逃げた。しかし、そこも流れてきた家に壊され、ずぶずぶの泥の上に１０㎝の雪が積もって靴も役に立たず、真っ暗闇の中をふたりのおばあさんの手を引いて小さな灯りを頼りに別の地区の集会所にやっとたどり着いた。凍えた身心を温めたのは薪の火と体をさすりあったお互いの手のぬくもり。『ずぶ濡れの姿はどぶねずみだったなあ。濡れた体に雪んこ降って、凍りついてさ。足さ止めたら死んじまう、がんばっぺ、がんばっぺ、励まし合って生き延びた。』辛い体験を語るのを後押ししてくれるのは、津波に持って行かれた妻、そして、『じいちゃんのさびしい顔見ると僕も悲しくなる』と言って励ましてくれる孫。だから前を向いてがんばろうと８０歳の語り部のおじいさんは話す」

語り部のおじいさん

石巻では支援活動を続けている神父様の案内で、一度は経営を断念したものの、みんなの支援のおかげでなんとか再建された「鰹節」「味噌、醤油」「海産物（わかめ）」のそれぞれの商店を訪問しました。『生活の中でわたしたちの商品を使ってください』と支援を依頼されました。まだ、わたしたちに出来る

再建された商店

ことはあると少しの希望を感じました。

写真左から案内していただいた仙塩地区婦人の
阿部さん、会津神父様(石巻教会)
お話しをしていただいた川原圭子さん

Q．今、想うことは何ですか。

A．　身内を亡くし、友を亡くし、仕事を無くし、住まいを無くし、生きがいを無くした人たち。失いかけた命をもらいそして避難所へ。それからやっと仮設住宅に入ったもののいろんな事情でその仮設を出て、転々と１７カ所の仮設暮しの人もいます（福島の例）仮設では雨風はしのげるがプライバシーはなく、仕事はなく、知り合いもない人たちはどうやって日々の暮らしを立てていくのでしょう。そうした中であの原発事故があった福島では将来の希望も持てず、自死（自殺）が増加し震災での直接死より、その後の関連死の数が上回ったと聞きました。人間一人ひとり想いも考えも違う。その人たちにどう寄り添えばいいのか。世間では震災について「風化」の言葉さえ聞こえてくる昨今、自問の日々が続きます。『わたしたちの支援活動が信仰による希望に裏付けられ、そこからあふれ出る実りの現れであったなら素晴らしいと思います。』とは震災の地元の仙台教区長（平賀司教様」）の言葉。
今は主に祈るしかない、「主よ、お話しください、僕は聞いております。」（サムエル記 3-9）きっとわたしにも出来る方法（みち）を神様は教えてくださるだろうと思っています。

聖書のみ言葉がどうしてもわからない時、登場人物のひとりに自分を重ねるとすーと心に響いてくることを実感することがある。イエス様はせっかくこのわたしに語りかけてくださっているのに、いつも他人事のようにしか聖書を読んでいないと気づくことがある。被災地に、被災者の方々に無関心ではないだろうか、他人事としていないだろうか、もし、自分が被災者だったら。フランシスコ教皇も、四旬節メッセージで「無関心が世界中に広まっています、わたしたちはキリスト者としてこの無関心という問題にとりくまなければならない」と呼びかけておられます。

編集後記

去る2月28日、大分教会で行われたペトロ・ファム・ホン・チン神父様の叙階式に参列する恵みをいただいた。外国からの神学生の方々の日本語学習のお手伝いをさせていただいているご縁で、ここ数年各地の教会にお祈りとお祝いに伺っている。祖国を遠く離れ、文化や習慣や言葉の違いを承知の上で、日本のカトリック教会のために生涯をささげようとしてくださる神父様方や神学生の方々には尊敬の念と感謝の気持ちでいっぱいになるし、叙階の瞬間にはいつも感動で涙があふれてしまう。その覚悟と信念は、遠くキリシタン宣教師の時代とも変わらず共通するものであろう。

残念ながらファム神父様のご家族はベトナムからいらっしゃることができなかったのだが、それについても新司祭は挨拶の中で、「見なさい、ここにわたしの母、私の兄弟がいる。」のみことばを引きながら、「ここにいらっしゃる神父様方、信者の皆様が私の親であり、きょうだいです。」と笑顔で言われた。このようなお気持ちに、私たちも少しでもこたえていきたいものだ。

（S・A）